

「SF・冒険・レトロフューチャー×リメイク ～挿絵画家 椋島勝一と小松崎茂の世界～」

会期：令和4年3月12日（土）～5月8日（日）

会場：昭和館3階研修室

特別協力：株式会社講談社・株式会社タミヤ

後援：千代田区・千代田区教育委員会

展示点数：143点

内訳：

① 実物 100点（内借用95点）

② 書籍 43点（内借用37点）

ごあいさつ

新型コロナウイルス感染症の拡大防止にともない、令和2年3月に開催中止となった特別企画展「SF・冒険・レトロフューチャー～ぼくたちの夢とあこがれ～」を再構成した特別企画展を開催します。

本企画展では雑誌『少年倶楽部』を中心に活躍し、「ペン画の神様」と呼ばれた挿絵画家・椋島勝一。その椋島が描く秀麗な挿絵に憧れて挿絵画家を志し、のちに空想科学(SF)挿絵画家として大成した小松崎茂。この2人の挿絵画家に焦点をあて、彼等の画業を通じながら戦中・戦後の少年文化とその移り変わりを紹介します。

いつの時代においても、子どもたちは読物から想像力を刺激され、さまざまな事象にあこがれを抱きました。それは戦時中であろうと、荒廃した終戦直後であろうとも、変わる事のない子どもたちの憧憬だったといえます。少年雑誌に描かれる空想科学(SF)や冒険、未来予想図の挿絵や口絵は、子どもたちの夢を掻き立てました。

昭和の子どもたちが抱いた夢とあこがれは、大人になった現代においても懐かしい未来(＝レトロフューチャー)として心の中に秘められているのではないのでしょうか。本企画展を通じて、多くの方々に少年文化の魅力を感じていただけると幸いです。

本展では、「Ⅰ. 椋島勝一と『少年倶楽部』」、「Ⅱ. 小松崎茂の活躍と移りゆく少年文化」、「Ⅲ. 少年たちの未来予想図」のコーナーに分けて紹介します。

プロローグ. 空想科学(SF)の黎明

- Ⅰ. 椋島勝一と『少年倶楽部』
- Ⅱ. 小松崎茂の活躍と移りゆく少年文化
- Ⅲ. 少年たちの未来予想図

プロローグ. 空想科学(SF)の黎明

押川春浪が明治 33 年(1900)に発表した科学冒険小説「海島冒険奇譚 海底軍艦」はSFのさきがけといわれています。昭和期に入ると、海野十三が少年向けの作品を意欲的に生み出し、宇宙や海底、未来世界などを舞台とした科学冒険小説を次々と発表しました。また、軍事冒険小説が人気を呼ぶようになり、『少年倶楽部』誌上では山中峯太郎「垂細垂の曙」(昭和 7 年)、海野十三「浮かぶ飛行島」(昭和 13 年)などが評判となります。そのなかでも、柁島勝一による写実的で美しい挿絵は、多くの子どもたちを魅了しました。

押川春浪

明治 9 年(1876)-大正 3 年(1914)

愛媛県松山市生まれ。早稲田大学在学中の明治 33 年(1900)、児童文学者の巖谷小波の推薦で『海島冒険奇譚 海底軍艦』を出版し、人気を得る。その後、次々と冒険小説を執筆、雑誌『冒険世界』『武侠世界』で主筆を務め、多くの後進の作家、画家育成に尽力した。

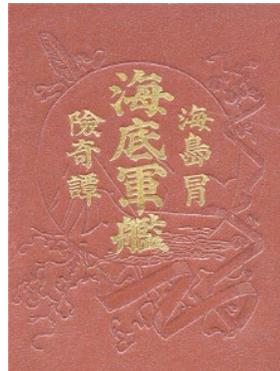


押川春浪(仙台文学館提供)

作品紹介

押川春浪「海島冒険奇譚 海底軍艦」

主人公・柳川が世界漫遊の旅先で学生時代の友人に会い、妻子を日本に連れ帰るよう頼まれる。しかし、途中海賊に襲われ船は沈没、友人の幼い息子・日出雄と二人でボートで逃げ出し、日本海軍の桜木大佐の指導のもと海底軍艦(電光艇)を密かに製造する無人島に漂着する。



押川春浪著『海島冒険奇譚 海底軍艦』(文武堂)
明治 33 年(1900)

I. 柁島勝一と『少年倶楽部』

I. 柁島勝一と『少年倶楽部』

講談社※が大正3年(1914)に創刊した『少年倶楽部』の編集長・加藤謙一は、新しい挿絵画家の発掘に邁進し、柁島勝一を見出しました。柁島が一躍注目された作品は、昭和5年(1930)から連載が始まった山中峯太郎「敵中横断三百里」の挿絵で、写実的な柁島の作品は、小説の世界観と溶け合い、臨場感あふれるものとなっています。続く「亜細亜の曙」も人気を博し、柁島は一躍挿絵画家の花形に躍り出ました。

※『少年倶楽部』創刊時は、「大日本雄弁会講談社」が正式社名であったが、昭和33年に「講談社」へと改称する。本企画展は「講談社」の表記で統一する。

柁島勝一

明治21年(1888)–昭和40年(1965)

長崎県諫早市生まれ。少年時代を鹿児島で過ごし、独学で絵画技術を習得する。大正11年(1922)、朝日新聞社に入社。翌年に「正チャンの冒険」を『アサヒグラフ』、『東京朝日新聞』に連載(文:織田小星)し、主人公がかぶる「正チャン帽」が大流行する。大正14年からは講談社の『少年倶楽部』を中心に、ペン画や軍事冒険小説の挿絵を描き、人気挿絵画家の地位を得た。精密かつ写実的な作風で、「船のカバシマ」と呼ばれるとおり、帆船や艦船を描くことを得意とした。

戦後は『少年クラブ』誌上で「ペン画傑作集」を連載、完成度の高い作品を生涯にわたり描きつづけた。



柁島勝一(柁島家提供)

作品紹介

山中峯太郎「敵中横断三百里」

(講談社『少年倶楽部』昭和5年初出)

日露戦争をモチーフにした軍事冒険小説。日本軍は勝利を収めるためにロシア軍陣地へ侵入し、敵の防衛線を偵察する必要があった。騎兵第9連隊の建川中尉と5人の騎兵はロシア兵になりすまして敵陣営に潜入、数々の危機を突破して情報を入手し、勝利を収めた。



山中峯太郎「敵中横断三百里」挿絵原画
(『少年倶楽部』昭和5年5月号)
画:柁島勝一

昭和5年(1930)
講談社蔵/長崎県美術館寄託



山中峯太郎「敵中横断三百里」挿絵原画
(『少年倶楽部』昭和5年7月号)
画:柁島勝一

昭和5年(1930)
講談社蔵/長崎県美術館寄託



山中峯太郎「敵中横断三百里」挿絵原画
(『少年倶楽部』昭和5年8月号)
画:柁島勝一

昭和5年(1930)
講談社蔵/長崎県美術館寄託

I. 柁島勝一と『少年倶楽部』



山中峯太郎「敵中横断三百里」挿絵原画
 (『少年倶楽部』昭和5年8月号)
 画:柁島勝一

昭和5年(1930)
 講談社蔵／長崎県美術館寄託



山中峯太郎「敵中横断三百里」挿絵原画
 (『少年倶楽部』昭和5年9月号)
 画:柁島勝一

昭和5年(1930)
 講談社蔵／長崎県美術館寄託



山中峯太郎著『敵中横断三百里』(講談社)
 装丁・画:柁島勝一

昭和6年(1931)



『少年倶楽部』昭和5年8月号

昭和5年(1930)

作品介绍

山中峯太郎「亜細亜の曙」

(講談社『少年倶楽部』昭和6年初出)

「日東の剣侠児」の異名を持つ陸軍将校の本郷が、盗まれた兵器製造所の機密文書を追い、南洋に位置する岩窟城へ単独潜入する。本郷は敵をあざむきながら岩窟城の深部に到達し、壊滅させる。当時の汎アジア主義が映し出された内容になっている。



山中峯太郎「亜細亜の曙」挿絵原画
 (『少年倶楽部』昭和6年4月号)
 画:柁島勝一

昭和6年(1931)
 講談社蔵／長崎県美術館寄託



山中峯太郎「亜細亜の曙」挿絵原画
 (『少年倶楽部』昭和6年8月号)
 画:柁島勝一

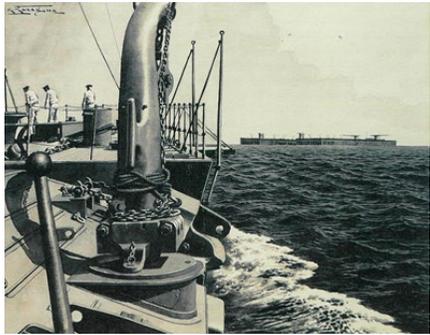
昭和6年(1931)
 講談社蔵／長崎県美術館寄託



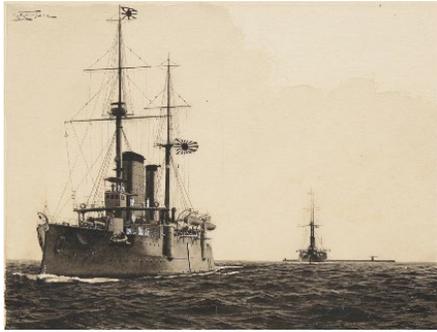
山中峯太郎「亜細亜の曙」挿絵原画
 (『少年倶楽部』昭和6年10月号)
 画:柁島勝一

昭和6年(1931)
 講談社蔵／長崎県美術館寄託

I. 柁島勝一と『少年倶楽部』

| | | | |
|--|---|---|---|
|  |  |  |  |
| <p>山中峯太郎「亜細亞の曙」挿絵原画 (『少年倶楽部』昭和7年4月号) 画:柁島勝一 昭和7年(1932) 講談社蔵／長崎県美術館寄託</p> | <p>山中峯太郎「亜細亞の曙」挿絵原画 (『少年倶楽部』昭和7年7月号) 画:柁島勝一 昭和7年(1932) 講談社蔵／長崎県美術館寄託</p> | <p>山中峯太郎著『亜細亞の曙』(講談社) 装丁・画:柁島勝一 昭和7年(1932) 講談社蔵</p> | <p>『少年倶楽部』昭和7年7月号 昭和7年(1932)</p> |
| <p>海野十三 明治30年(1897)–昭和24年(1949) 徳島県生まれ。戦中は軍事科学小説を量産、「日本SFの父」と呼ばれる。早稲田大学理工科で電気工学を専攻。逓信省電気試験所に勤務するかたわら、昭和3年(1928)、『新青年』に「電気風呂の怪死事件」と名付けた探偵小説を発表して小説家としてデビューした。太平洋戦争中、海軍報道班員として従軍した。</p>  <p>海野十三 (徳島県立文学書道館提供)</p> | <p>作品紹介 海野十三「浮かぶ飛行島」 (講談社『少年倶楽部』昭和13年初出) シンガポールと香港の間に英国軍によって建造された巨大な人工島に潜入した川上機関大尉と杉田二等水兵はこの島が移動可能な航空母艦であることを突き止める。この飛行島を拠点として日本攻略を企てていること知り、2人は飛行島の爆破を決心する。</p> |  <p>海野十三「浮かぶ飛行島」挿絵原画 (『少年倶楽部』昭和13年1月号) 画:柁島勝一 昭和13年(1938) 講談社蔵／長崎県美術館寄託</p> |  <p>海野十三「浮かぶ飛行島」挿絵原画 (『少年倶楽部』昭和13年1月号) 画:柁島勝一 昭和13年(1938) 講談社蔵／長崎県美術館寄託</p> |

I. 柁島勝一と『少年倶楽部』



海野十三「浮かぶ飛行島」挿絵原画
 (『少年倶楽部』昭和13年2月号)
 画: 柁島勝一

昭和13年(1938)
 講談社蔵/長崎県美術館寄託



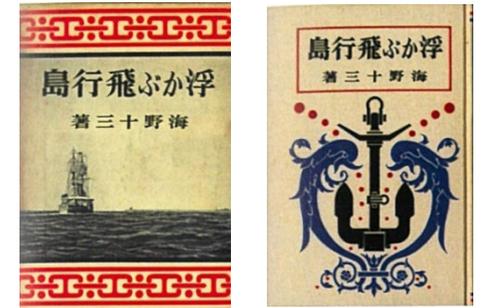
海野十三「浮かぶ飛行島」挿絵原画
 (『少年倶楽部』昭和13年7月号)
 画: 柁島勝一

昭和13年(1938)
 講談社蔵/長崎県美術館寄託



海野十三「浮かぶ飛行島」挿絵原画
 (『少年倶楽部』昭和13年10月号)

画: 柁島勝一
 昭和13年(1938)
 講談社蔵/長崎県美術館寄託



海野十三著『浮かぶ飛行島』(講談社)
 装丁・画: 柁島勝一

昭和14年(1939)
 講談社蔵



『少年倶楽部』昭和13年1月号

昭和13年(1938)

作品介绍

海野十三「太平洋魔城」

(講談社『少年倶楽部』昭和14年初出)

海洋学者・太刀川時夫は軍部より依頼を受け、海難が続く太平洋上のある地点の探査に赴く。そこで太刀川は、海上ににょきつと首を出した奇怪な魔城を見た。ソ連軍はこの魔城から日本攻略を企んでいた。



海野十三「太平洋魔城」挿絵原画
 (『少年倶楽部』昭和14年1月号)

画: 柁島勝一
 昭和14年(1939)
 講談社蔵/長崎県美術館寄託



海野十三「太平洋魔城」挿絵原画
 (『少年倶楽部』昭和14年7月号)

画: 柁島勝一
 昭和14年(1939)
 講談社蔵/長崎県美術館寄託

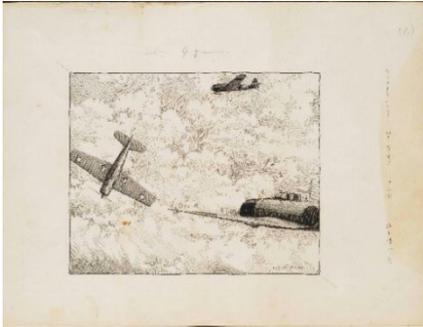
I. 柁島勝一と『少年倶楽部』

| | | | |
|--|---|--|---|
|  |  |  |  |
| <p>海野十三「太平洋魔城」挿絵原画 (『少年倶楽部』昭和 14 年 10 月号) 画: 柁島勝一</p> <p style="text-align: right;">昭和 14 年(1939) 講談社蔵／長崎県美術館寄託</p> | <p>海野十三「太平洋魔城」挿絵原画 (『少年倶楽部』昭和 14 年 10 月号) 画: 柁島勝一</p> <p style="text-align: right;">昭和 14 年(1939) 講談社蔵／長崎県美術館寄託</p> | <p>海野十三「太平洋魔城」挿絵原画 (『少年倶楽部』昭和 14 年 12 月号) 画: 柁島勝一</p> <p style="text-align: right;">昭和 14 年(1939) 講談社蔵／長崎県美術館寄託</p> | <p>海野十三著『太平洋魔城』(講談社) 装丁・画: 柁島勝一</p> <p style="text-align: right;">昭和 14 年(1939) 講談社蔵</p> |
|  | <p>戦争の影響</p> <p>柁島勝一が活躍した時代は、戦争の時代でもありました。戦争を題材にした作品を多く手掛けることになった柁島は、この分野においても、迫真的な描写で読者たちを魅了しました。</p> <p>戦局が悪化し、情報統制が厳しかった昭和 19 年(1944)の作品「敵艦隊撃滅」の原画には、海軍省による検閲印と修正跡が残されています。海軍の検閲が少年雑誌の挿絵にも及んでいたことが伺えます。</p> | <p>作品紹介</p> <p>高戸顕隆「敵艦隊撃滅」 (講談社『少年倶楽部』昭和 19 年初出)</p> <p>作者が少年に宛てた手紙という形式で書かれた海軍戦記。昭和 17 年(1942)の南太平洋海戦を題材にしたものであるが、史実の戦果とは異なり、日本海軍は華々しい活躍をみせる。</p> <p>作者の高戸は海軍報道部の現役軍人であり、プロパガンダ色が濃い作品である。</p> |  |
| <p>『少年倶楽部』昭和 14 年 12 月号 昭和 14 年(1939)</p> | | | <p>高戸顕隆「敵艦隊撃滅」挿絵原画 (『少年倶楽部』昭和 19 年 2 月号) 画: 柁島勝一</p> <p style="text-align: right;">昭和 19 年(1944) 講談社蔵／長崎県美術館寄託</p> |

I. 柁島勝一と『少年倶楽部』

| | | | |
|--|--|--|---|
|  |  |  |  |
| <p>高戸顕隆「敵艦隊撃滅」挿絵原画 (『少年倶楽部』昭和19年3月号) 画: 柁島勝一 昭和19年(1944) 講談社蔵/長崎県美術館寄託</p> | <p>高戸顕隆「敵艦隊撃滅」挿絵原画 (『少年倶楽部』昭和19年6月号) 画: 柁島勝一 昭和19年(1944) 講談社蔵/長崎県美術館寄託</p> | <p>高戸顕隆「敵艦隊撃滅」挿絵原画 (『少年倶楽部』昭和19年2月号) 画: 柁島勝一 「艦型がわかる航空母艦を消す」との書き込みがあり、検閲後に修正液で消去した跡がある。 昭和19年(1944) 講談社蔵/長崎県美術館寄託</p> | <p>高戸顕隆「敵艦隊撃滅」挿絵原画 (『少年倶楽部』昭和19年4月号) 画: 柁島勝一 右下にある印は海軍省による検閲印。 昭和19年(1944) 講談社蔵/長崎県美術館寄託</p> |
|  |  |  |  |
| <p>『少年倶楽部』昭和19年2月号 昭和19年(1944)</p> | <p>『講談社の絵本 タノシイ一年生第三学期』挿絵原画 画: 柁島勝一 昭和15年(1940) 講談社蔵/長崎県美術館寄託</p> | <p>『航空少年』昭和16年12月号(創刊号) 表紙: 柁島勝一 表紙タイトルは「わが陸軍の重爆機」。陸軍の百式重爆撃機「呑龍」が描かれている。 昭和16年(1941)</p> | <p>『航空少年』昭和19年5月号 表紙: 柁島勝一 表紙タイトルは「巖たり日本海軍」。第二艦隊の旗艦「愛宕」が描かれている。 昭和19年(1944)</p> |

I. 柁島勝一と『少年倶楽部』

| | | |
|---|--|--|
|  |  | <p>女の子も読んでいた！『少年倶楽部』投書欄より</p> <p>私は女ですけども、少年倶楽部が、大好きです。中でも、勇ましいしんぴなのがー等すきです。山中峯太郎先生野村胡堂先生たちのは、私はなにをさしおいてもすきです。父にもわらわれました。「お前は少倶に夢中になっている」といってわらわれましたが、父もごはんより本がすきなのです。どうぞ先生たちに御礼を申し上げて下さい。</p> <p>神奈川県 鈴木クニ 第19巻第11号(昭和7年) *一部抜粋</p>  <p>漫画を読む子どもたち 昭和14年(1939)2月頃 沼野謙(JPS)撮影</p> |
| <p>『少年倶楽部』表紙原画「撃墜」 (『少年倶楽部』昭和20年3・4月合併号) 画：柁島勝一 昭和20年(1945) 講談社蔵／長崎県美術館寄託</p> | <p>『少年倶楽部』昭和20年3・4月合併号 表紙：柁島勝一 紙不足によりページ数は少なく、1色刷りで印刷された。 昭和20年(1945)</p> | |
| <p>ペン画の神様</p> <p>柁島勝一の画業は精密な「ペン画」に尽きるといえます。この絵画技術は、西洋の雑誌や写真を参考に模写することで習得されたものであり、誰にも頼らず独学で身につけたものでした。</p> <p>極細の線が絶妙な濃淡で描かれるペン画は、1枚仕上げるのに2週間ほどかかります。しかし、柁島は子ども相手であっても決して手を抜くことはなく、挿絵画家としての誇りを持ち続けていました。</p> |  <p>「高峰カメット山」 (『少年クラブ』昭和28年7月号) 画：柁島勝一 昭和28年(1953) 講談社蔵／長崎県美術館寄託</p> |  <p>『少年クラブ』昭和28年7月号 昭和28年(1953)</p> |

I. 柁島勝一と『少年倶楽部』

正ちゃんの冒険

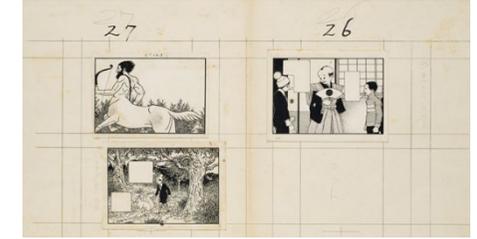
漫画「正ちゃんの冒険」は大正 12 年(1923)1 月 25 日付け『日刊アサヒグラフ』創刊号から連載が開始され、物語は織田小星(信恒)、絵を柁島勝一(東風人)が担当しました。同年 9 月の関東大震災により一時休載したものの、翌 10 月から『朝日新聞』にて連載が再開され、大正 15 年まで続きました。柁島が得意とした精密な挿絵とは異なる画風の「正ちゃんの冒険」ですが、相棒のリスと一緒に不思議な世界を冒険する物語は子どもたちに人気を博し、柁島の代表的な作品のひとつとなりました。

戦後、柁島は再び『絵ものがたり 正ちゃんのぼうけん』(全 2 巻、講談社)を刊行します。『絵ものがたり 正ちゃんのぼうけん』は、戦前の正ちゃんに比べ、登場人物や背景が細かく描き込まれています。



正ちゃんのぼうけん「あめやさん」原画
(『絵ものがたり 正ちゃんのぼうけん ②』)
画: 柁島勝一

昭和 26 年(1951)
講談社蔵／長崎県美術館寄託



正ちゃんのぼうけん「もりのあき」原画
(『絵ものがたり 正ちゃんのぼうけん ②』)
画: 柁島勝一

昭和 26 年(1951)
講談社蔵／長崎県美術館寄託



『絵ものがたり 正ちゃんのぼうけん②』
絵: 柁島勝一 文: 織田信恒

昭和 26 年(1951)
講談社蔵

II. 小松崎茂の活躍と移りゆく少年文化

のちに SF 挿絵画家の第一人者となる小松崎茂は青年期に日本画家を志したものの、柁島勝一の挿絵にあこがれて、挿絵画家へ転向しました。昭和 13 年(1938)にデビューした小松崎は、挿絵画家・野口昂明からの紹介で、国防科学雑誌『機械化』で挿絵や図解を描くようになります。メカニックに造詣が深かった小松崎が描く空想科学の世界、シリーズ「未来の新案兵器」は緻密でありながら、ダイナミックな迫力があり人気を博しました。『機械化』の中心画家となった小松崎は、挿絵だけでなく図解の解説も担当し、SF 挿絵画家として頭角を現しました。

戦後になると、小松崎は『冒険活劇文庫』創刊を契機とした絵物語ブームの時流に乗り、「地球SOS」などの絵物語作品を発表し、子どもたちの人気を博しました。

小松崎茂

大正 4 年(1915)–平成 13 年(2001)

東京南千住生まれ。青年期に日本画家を志したが、柁島勝一にあこがれて挿絵画家へと転向する。昭和 13 年(1938)に挿絵画家としてデビューし、未来兵器や空想科学を題材にした作品を描き評判を呼んだ。

終戦をへて、荒廃した子どもたちに夢と希望を与えたいという意欲とともに、絵物語ブームの時流に乗って人気を博す。さらには多種多様な「メカ」が動き回る未来を描くことを得意とし、昭和 30 年代に興った戦記物ブームでは軍艦や戦闘機の口絵も多く手掛け、ボックスアートの先駆者としてプラモデルの大ヒットに貢献、晩年に至るまで精力的に作品を生み出しつづけた。



小松崎茂(森健児撮影、根本圭助提供)

国防科学雑誌『機械化』

陸軍省の外郭団体である機械化国防協会が昭和 15 年(1940)5 月に創刊した少年向け軍事科学雑誌。挿絵画家・野口昂明からの紹介で、小松崎茂は昭和 16 年頃より『機械化』で挿絵や図解を描くようになりました。小松崎は自身の名前だけでなく、ペンネーム(北信吉、三村武、最上三郎の名義)を使い分け、軍事や産業に関わる空想科学の世界を描きました。とくに、シリーズ「未来の新案兵器」では、小松崎自身が発案した空想科学兵器の緻密な展開図が話題を呼びました。しかし、戦局の悪化を受けて、昭和 20 年 2・3 月合併号をもって廃刊となりました。



松戸陸軍工兵学校にて(左から 2 番目が小松崎茂)
昭和 18 年(1943)頃 根本圭助提供



『機械化』昭和 18 年 9 月号

表紙: 小松崎茂「水陸両用戦車」

機械化国防協会が昭和 15 年 5 月に創刊した雑誌。小松崎が空想科学で描く戦闘機や兵器が人気を博した。昭和 20 年 2・3 月合併号をもって廃刊となった。

昭和 18 年(1943)



雑誌口絵「未来の新案兵器 電波探知機の活躍」
(『機械化』昭和 19 年 12 月号)

画: 小松崎茂

昭和 19 年(1944)

| | | | |
|--|---|---|--|
|  | <p>絵物語ブームの到来</p> <p>昭和 23 年(1948)8 月、明々社(現・少年画報社)から絵物語雑誌として『冒険活劇文庫』が創刊され、絵物語ブームが到来します。小松崎茂もその時流に乗り、代表作「地球SOS」の連載が『冒険活劇文庫』で開始され、絵物語作家として子どもたちの人気を獲得していきます。</p> | <p>作品紹介</p> <p>小松崎茂「地球SOS」 (明々社『冒険活劇文庫』昭和 23 年初出)</p> <p>原子力ロケット旅客機コメット号は地球征服を目指すバグア彗星人に襲撃され、同乗していた日本人少年ビリーとアメリカ人少年ペニーは、少女ロッタとともに誘拐されてしまう。進んだ科学技術をもつバグア彗星人と地球科学陣との戦いが繰り広げられる。</p> |  |
| <p>絵はがき「ただ一撃」 画:小松崎茂</p> <p>第 1 回陸軍美術展に出品された作品を絵はがきにしたもの。イギリス戦闘機「ホーカーハリケーン」を追撃する日本陸軍一式戦闘機「隼」が描かれている。 昭和 18 年(1943)</p> | | | <p>『冒険活劇文庫』第 2 号 絵物語「地球 SOS」の連載がこの号から開始された。 昭和 23 年(1948)10 月</p> |
|  |  | <p>作品紹介</p> <p>小松崎茂「南極の聖火」 (光文社『少年』昭和 26 年初出)</p> <p>新田光二少年は、南極で鉱脈を探索中に不幸な死をとげた父親の志を継ぎ、父の仲間であったハワード博士の探検隊とともに南極に到着する。しかしながら南極探検中も、敵の「レッド・スピード」の攻撃を受け、幾多もの苦難にさらされる。</p> |  |
| <p>『冒険活劇文庫』第 3 号 表紙:小松崎茂「地球SOS」 昭和 23 年(1948)11 月</p> | <p>「地球SOS」(復刻版用)カバー原画(『地球SOS 超特作科学冒険物語』平成 14 年) 画:小松崎茂 昭和 23 年に発表した「地球SOS」復刻版用に描かれた作品。 平成 9 年(1997) 個人蔵</p> | | <p>雑誌付録「南極の聖火」 (『少年』昭和 30 年 6 月号付録) 作・画:小松崎茂 昭和 30 年(1955)</p> |

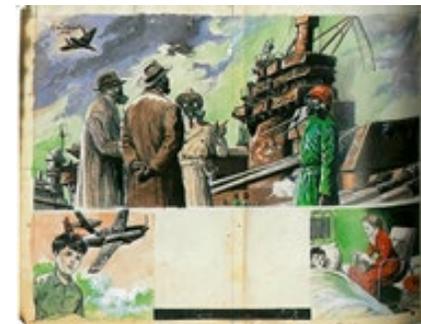


作品介绍

小松崎茂「第二の地球」

(光文社『少年』昭和 27 年初出)

西野達夫技師と書生の八島平太は地球征服を狙うモンテクリスト率いる悪の科学団に捕らわれてしまう。達夫のひとり息子である和夫少年は対原子力U光線の開発者、尾形博士に同行し戦闘機のパイロットとなって二人を救おうとする。



「南極の聖火」原画
(『少年』昭和 27 年 1 月号)
作・画: 小松崎茂

昭和 27 年(1952)
個人蔵

「第二の地球」原画
(『少年』昭和 29 年 2 月号)
作・画: 小松崎茂

昭和 29 年(1954)
個人蔵

「第二の地球」原画
(『少年』昭和 29 年 3 月号)
作・画: 小松崎茂

昭和 29 年(1954)
個人蔵

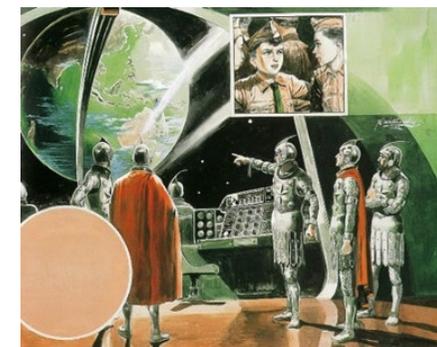


作品介绍

小松崎茂「大暗黒星」

(光文社『少年』昭和 30 年初出)

1960 年の春、地球に似た惑星「大暗黒星」から遊星人が地球侵略のために軍事基地を奇襲攻撃する。核攻撃を受けた北極の氷山が融け北半球の都市が水没するなど、危機的な状況から地球を救うために少年飛行士の高田わたると兄のさとしが奮闘する。



「第二の地球」原画
(『少年』昭和 29 年 8 月号)
作・画: 小松崎茂

昭和 29 年(1954)
個人蔵

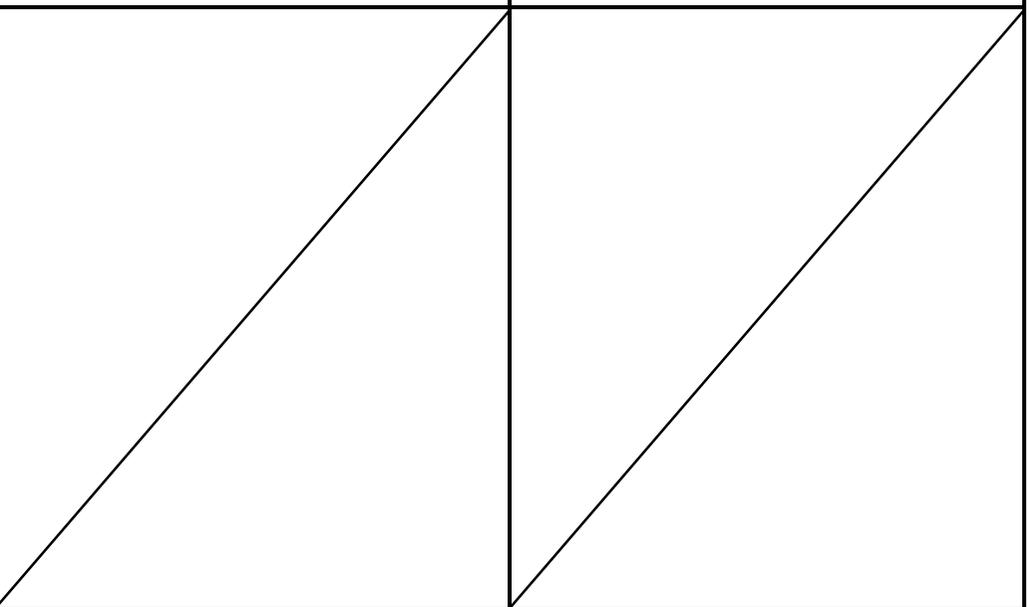
『少年』昭和 29 年 8 月号

昭和 29 年(1954)

「大暗黒星」原画
(『少年』昭和 30 年 8 月号)
作・画: 小松崎茂

昭和 30 年(1955)
個人蔵

| | | | |
|---|--|---|---|
| <p>戦記物ブーム</p> <p>昭和 30 年代になると、実在していた軍艦や戦闘機の口絵などが少年雑誌に掲載され、さらにはプラモデル人気も重なり、戦記物ブームが生まれました。兵器やメカニックの描写を得意とする小松崎茂は、このブームを牽引するかたちとなり、多くの戦記物作品を発表しました。</p> <p>小松崎の代表作として思い浮かぶのは、プラモデルのボックスアートと「戦艦大和」ではないでしょうか。複雑なメカニックを緻密に描く小松崎の作品に、多くの子どもたちが圧倒されました。</p> |  <p>「空の神兵」原画 画：小松崎茂 パレンバン空挺作戦を描いた作品。陸軍挺身部隊は愛称「空の神兵」と呼ばれた。 昭和 36 年(1961) 個人蔵</p> |  <p>「戦艦大和」原画 (『週刊少年サンデー』第 4 巻第 27 号) 画：小松崎茂 昭和 37 年(1962) 個人蔵</p> |  <p>「隼の奮戦」原画 (『週刊少年サンデー』第 5 巻第 38 号) 画：小松崎茂 陸軍一式戦闘機「隼」がアメリカ陸軍戦闘機「P-40」と交戦している様子。下図は「隼」の飛行戦隊別の尾翼マークである。 昭和 38 年(1963) 個人蔵</p> |
| <p>ボックスアート</p> <p>昭和 30 年代初頭に起きたプラモデルブームの火付け役として、小松崎茂の存在は欠かせません。</p> <p>田宮模型(現・株式会社タミヤ)の田宮俊作は、『世界の艦船』の読者欄を頼りにして小松崎へ長文の手紙を書き、ボックスアートの制作を依頼します。最初に描かれた作品は昭和 36 年(1961)の木製模型「航空母艦 大鳳」、それに続くのがプラスチック製模型のボックスアートとして有名な「ドイツ中戦車 パンサー」でした。子どもたちに人気のあった小松崎を採用し、さらには組み立てた際の想像力と購買意欲をかき立てたことで、田宮模型からは多くのヒット商品が誕生しました。</p> |  <p>田宮模型 木製模型「航空母艦 大鳳」原画 画：小松崎茂 小松崎が田宮模型のボックスアートを初めて描いた作品。木製模型はソリッドモデルと呼ばれ、プラモデルが普及するまでは模型の主流であった。「大鳳」は昭和 19 年 3 月に竣工した日本初の重装甲空母であったが、竣工からわずか 3 ヶ月後、マリアナ沖海戦で沈没した。 昭和 36 年(1961) 株式会社タミヤ蔵</p> |  <p>田宮模型「ドイツ中戦車 パンサー」複製原画 画：小松崎茂 「パンサー」は田宮模型の社運をかけたプラモデルであり、小松崎のボックスアートによって大ヒット商品となった。日本初のリモコン戦車プラモデル。 昭和 36 年(1961) 株式会社タミヤ蔵</p> | |

| | | | |
|--|--|---|---|
|  |  |  |  |
| <p>田宮模型「ドイツ駆逐戦車 ロンメル」原画 画：小松崎茂 正式名称は「ヤークトパンター」。田宮模型は販売促進のために、著名なドイツ陸軍軍人エルヴィン・ロンメルから商品名を名付けた。 昭和 38 年(1963) 株式会社タミヤ蔵</p> | <p>田宮模型「日本海軍零式艦上戦闘機 52 型」原画 画：小松崎茂 昭和 38 年(1963) 株式会社タミヤ蔵</p> | <p>田宮模型「日本陸軍一式戦闘機 隼」原画 画：小松崎茂 小松崎は昭和 18 年の第 1 回陸軍美術展において「隼」の勇姿を描いた作品を出展しており、まさに原点ともいえる画題である。 昭和 39 年(1964) 株式会社タミヤ蔵</p> | <p>田宮模型「ソビエト T10 スターリン」ボックス 画：小松崎茂 昭和 39 年(1964) 個人蔵</p> |
| <p>女の子も読んでいた！ 『少年クラブ』投書欄より 私は女子の愛読者です。本が好きですが、その中でことに冒険、探偵小説は大好きです。最初兄がとっていましたが昨年夏、ちょっとみせてもらったのがきっかけで、こんど私がとることになりました。小松崎先生のものがおもしろいです。 緑の山河、海の子ロマンなども、次号がまちどおしくてたまりません。私は、ロマンのような悪をしらず自分で強く正しく生きようとする心の持主が大好きです。 少年クラブがますます、発展するよう祈っています。 東京都大田区調布 田村恭子 40 巻 12 号 (昭和 28 年 10 月) *一部抜粋</p>  <p>雑誌を読む少女たち・東京 昭和 22～27 年(1947～1952) ディミトリー・ボリア撮影 マッカーサー記念館提供</p> | |  | |

Ⅲ. 少年たちの未来予想図

高度経済成長期になると、少年雑誌は月刊から週刊へと移行していきます。昭和30年代初頭、少年雑誌では戦記物ブームが到来、さらにはSFという言葉も定着し、多種多様な「メカ」が動き回る未来の世界が描かれた口絵が人気を呼びました。

戦後の少年文化がめまぐるしく変化するなかで、空想科学から戦記物まで、小松崎はそれぞれの時代の温度感を敏感に感じ取りながら、未来の世界・空想の世界を描きつづけました。その作品は媒体を変えながらも、大衆に広く愛され、終戦直後の不安定な時代から高度経済成長期までうつりゆく昭和の時代を生きた子どもたちのあこがれでありつづけています。

講談社『少年少女世界科学冒険全集』

少年雑誌の主力が絵物語から漫画へと移り変わる昭和30年代、小松崎茂は得意としているSF物の表紙絵や口絵を多く手掛けるようになりました。その代表作ともいえるのが、講談社の『少年少女世界科学冒険全集』です。小松崎は全35巻中、1冊をのぞく34巻分の表紙絵と口絵を担当し、その美しい作品にたくさんの子どもたちが魅せられました。この全集は学校図書館などでも読めるSF物として子どもたちに親しまれました。



講談社『少年少女世界科学冒険全集』第1～35巻(第4・5巻のぞく)

昭和31～33年(1956～58)
講談社蔵



「宇宙船ガリレオ号」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第1巻)

画:小松崎茂
昭和31年(1956)
講談社蔵



「少年火星探検隊」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第2巻)

画:小松崎茂
昭和31年(1956)
講談社蔵



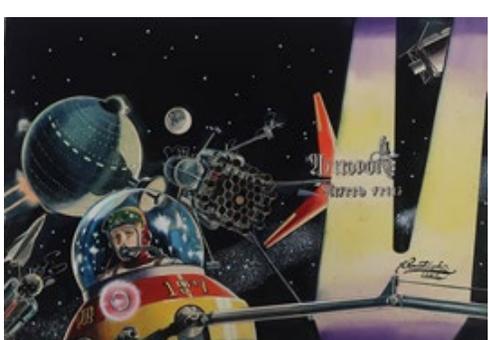
「宇宙探検 220日」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第3巻)

画:小松崎茂
昭和31年(1956)
講談社蔵

Ⅲ. 少年たちの未来予想図

| | | | |
|--|---|--|--|
|  |  |  |  |
| <p>「ハンス月世界へいく」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第6巻) 画:小松崎茂 昭和31年(1956) 講談社蔵</p> | <p>「赤い惑星の少年」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第7巻) 画:小松崎茂 昭和31年(1956) 講談社蔵</p> | <p>「深海冒険号」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第8巻) 画:小松崎茂 昭和31年(1956) 講談社蔵</p> | <p>「地底王国」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第9巻) 画:小松崎茂 昭和31年(1956) 講談社蔵</p> |
|  |  |  |  |
| <p>「緑の宇宙人」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第10巻) 画:小松崎茂 昭和31年(1956) 講談社蔵</p> | <p>「海底五万マイル」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第11巻) 画:小松崎茂 昭和31年(1956) 講談社蔵</p> | <p>「チベットの秘密都市」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第12巻) 画:小松崎茂 昭和31年(1956) 講談社蔵</p> | <p>「金星の謎」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第13巻) 画:小松崎茂 昭和31年(1956) 講談社蔵</p> |

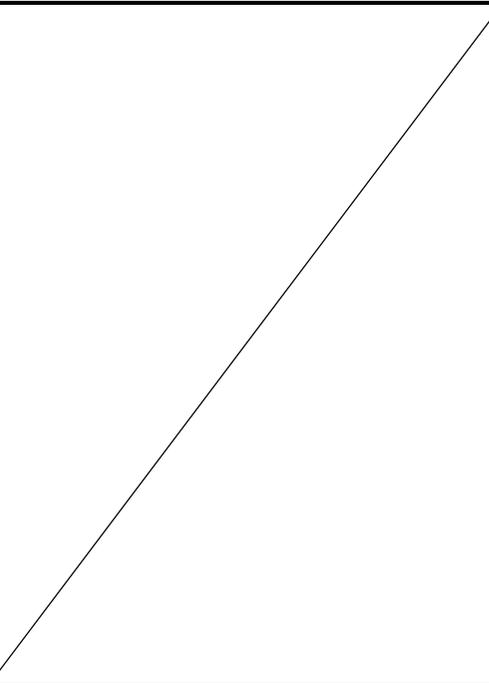
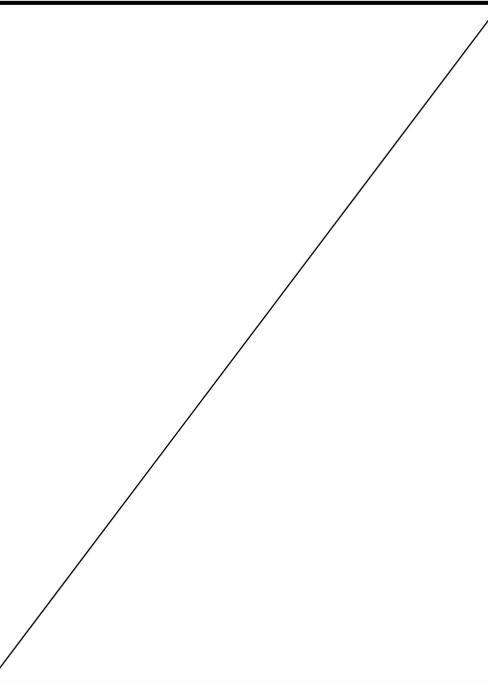
Ⅲ. 少年たちの未来予想図

| | | | |
|--|---|--|--|
|  |  |  |  |
| <p>「第十番惑星」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第14巻) 画:小松崎茂 昭和31年(1956) 講談社蔵</p> | <p>「火星にさく花」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第15巻) 画:小松崎茂 昭和31年(1956) 講談社蔵</p> | <p>「宇宙島の少年」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第16巻) 画:小松崎茂 昭和31年(1956) 講談社蔵</p> | <p>「両棲人間一号」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第17巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> |
|  |  |  |  |
| <p>「黄金のずがい骨」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第18巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> | <p>「火星にいった地球人」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第19巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> | <p>「魔の衛星カリスト」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第20巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> | <p>「宇宙少年ケムロ」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第21巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> |

Ⅲ. 少年たちの未来予想図

| | | | |
|--|---|--|--|
|  |  |  |  |
| <p>「月ロケットの秘密」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第22巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> | <p>「ぼくらの宇宙旅行」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第23巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> | <p>「恐怖の月爆弾」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第24巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> | <p>「宇宙戦争」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第25巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> |
|  |  |  |  |
| <p>「空中列車地球号」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第26巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> | <p>「地底世界探検隊」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第27巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> | <p>「宇宙の開拓者」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第28巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> | <p>「謎のロボット星」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第29巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> |

Ⅲ. 少年たちの未来予想図

| | | | |
|--|---|--|--|
|  |  |  |  |
| <p>「北極の秘島」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第30巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> | <p>「土星の宇宙船」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第31巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> | <p>「ロケット競争の謎」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第32巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> | <p>「海底艦隊」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第33巻) 画:小松崎茂 昭和32年(1957) 講談社蔵</p> |
|  |  |  |  |
| <p>「土星へいく少年」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第34巻) 画:小松崎茂 昭和33年(1958) 講談社蔵</p> | <p>「科学の冒険者たち」表紙原画(講談社『少年少女世界科学冒険全集』第35巻) 画:小松崎茂 昭和33年(1958) 講談社蔵</p> | | |

Ⅲ. 少年たちの未来予想図

近未来への期待感

昭和 30 年代以降、小松崎茂は未来の乗り物や宇宙をテーマとした作品を精力的に発表しました。小松崎が描く鮮やかな未来の世界に多くの子どもたちが胸を躍らせ、夢を抱きました。

また、ボックスアートでもその世界観が巧みに表現されました。大胆かつ躍動的な構図が描かれたプラモデルパッケージは、子どもたちの羨望の的であったことはい言うまでもありません。



「宇宙ステーション」原画
(『たのしい三年生』号数不明)
画: 小松崎茂

科学者のヴェルナー・フォン・ブラウンが提案した宇宙ステーションをモデルに描かれた。
昭和 33 年(1958)
個人蔵



「人工えいせいをまもれ」原画
(『たのしい三年生』昭和 35 年 5 月号)
画: 小松崎茂

昭和 35 年(1960)
個人蔵



田宮模型「スカイワゴン」原画
(発泡スチロール ホバークラフト)
画: 小松崎茂

発泡スチロール製の工作キット。田宮俊作が「大鳳」と同時に依頼した初めてのボックスアート。小松崎が描く空中に浮くスポーツカーの姿に子どもたちはあこがれ、近未来への想像をかき立てられた。
昭和 36 年(1961)
株式会社タミヤ蔵



田宮模型「走る超特急」原画
(夢の超特急シリーズ)
画: 小松崎茂

世界初の高速鉄道として昭和 39 年 10 月 1 日に東海道新幹線が開通した。実車よりも早く模型が企画されたので、新幹線の名称はまだ箱書きされていない。のちにこの形はゼロ系と呼ばれた。

昭和 39 年(1964)
株式会社タミヤ蔵



田宮模型「デラックス走る超特急」原画
(夢の超特急シリーズ)
画: 小松崎茂

昭和 39 年(1964)
株式会社タミヤ蔵



田宮模型「アタックファイブ」原画
(SF シリーズ)
画: 小松崎茂

昭和 42 年(1967)
株式会社タミヤ蔵



田宮模型「スパークエイト」原画
(SF シリーズ)
画: 小松崎茂

昭和 42 年(1967)
株式会社タミヤ蔵

| | | | |
|---|--|--|---|
|  |  |  |  |
| <p>田宮模型「ファイターナイン」原画 (SF シリーズ) 画:小松崎茂</p> <p style="text-align: right;">昭和 42 年(1967) 株式会社タミヤ蔵</p> | <p>田宮模型「ファイターナイン」ボックス印刷 (SF シリーズ)</p> <p style="text-align: right;">昭和 42 年(1967) 株式会社タミヤ蔵</p> | <p>田宮模型 「強力 6 輪装甲車 U59 ワイルドキャット」 原画 (SF 装甲車シリーズ) 画:小松崎茂</p> <p style="text-align: right;">昭和 44 年(1969) 株式会社タミヤ蔵</p> | <p>田宮模型「強力 6 輪装甲車 U87 ストロング」原画 (SF 装甲車シリーズ) 画:小松崎茂</p> <p style="text-align: right;">昭和 44 年(1969) 株式会社タミヤ蔵</p> |

エピソード ～あこがれの連鎖・空想が実現する時代へ～

戦中に青年期を過ごした小松崎茂は、梶島勝一が描く精密なメカニック描写にあこがれを抱き、挿絵画家として研鑽を積みました。当時の空想科学は戦争の影響が色濃かったものの、梶島が描く軍艦の雄大さは子どもたちだけでなく、画家である小松崎の心もわしづかみにする力強さがありました。

しかし、昭和 20 年(1945)の東京大空襲で小松崎は南千住の実家を失い、戦争の悲惨さと終戦直後の荒廃を目の当たりにします。その経験をふまえ、小松崎は自分の描く作品で戦争に翻弄された子どもたちに夢と希望を与えることを目指しました。

「子どもたちに、何か与えなくては、私はそう思わずにいらなかった。夢と希望とをである。夢でいいのだ。一瞬、彼らが夢想する輝かしい未来、それは栄光と富とプライドに満ちたものでなければ。その一瞬の夢が、彼らを奮い起たせるはずであった。累々たる瓦礫の廃墟の中で、私はその思いに胸を熱くした。」

(小松崎茂「終戦後の絵物語時代」『太陽 No.191』平凡社、昭和 54 年)

還暦を超えた頃出版した『メカニック・ファンタジー 小松崎茂の世界』(昭和 57 年、集英社)の巻頭には次の言葉が記されています。

「この本は夢である。しかし、過去に私の考えたものが実現した例は多い。私はまた、新しい出発をしよう。」

昭和の子どもたちが抱いた未来予想図は、私たちが生きる時代において、すでに身近な事象として具現化していることも多いでしょう。それでも、描かれた空想科学の世界観はレトロフューチャーとして新たな魅力を放ちつづけています。

イベント

(1) 活動弁士による無声映画上映会

期日：令和4年3月27日（日）

時間：

1回目 12時45分～13時30分

2回目 15時～15時45分

演目：ジョルジュ・メリエス監督『月世界旅行』（14分、1902年フランス制作）、他

場所：1階ニュースシアター

定員：各回30名

(2) 展示解説

担当者による展示解説を行います。

期日：令和4年4月3日（日）・4月24日（日）

時間：14時30分～（所要時間 約45分）

場所：3階特別企画展会場